

## 臥牛サロン 新企画

- 複数の曲に共通するテーマを解説し、各曲の謡と仕舞の見どころをたっぷりお楽しみ頂きます。
- サロンの開催は、奇数月（隔月）の下旬となります。
- 時間：18:30- 19:45前後
- 参加費：自由席2,500円、椅子指定席 3,000円
- 新企画次回： 9月23日祝（月）18:30～

出演者



田崎 甫  
はじめ

シテ方宝生流職分  
1988年 神奈川県生まれ、叔父の宝生流能楽師 田崎隆三に師事。2011年東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業、20代宗家宝生和英の内弟子。同年「金札」で初シテ。2018年独立。九段「幸宝会」主宰。2019年4月東京藝術大学音楽学部教育研究助手を拝任。



葛野 りさ  
かどの

シテ方宝生流職分  
平成元年生、富山県富山市出身。20代宗家宝生和英に師事。平成23年東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。平成24年「清経」ツレにて初舞台を踏み、平成29年「田村」で初シテ。



臥牛サロン次回ご予約・お問合せ

☎ 0545-38-9939 (たざき)

☎ 090-2757-0620

二〇一九年七月二十九日(月)

## 臥牛サロン 第十三回

様々な型による表現

（春夏秋冬）

プロデューズ

田崎 甫

(宝生流能楽師)

於 臥牛敷舞台

富士宮市粟倉南町一三二

舞台当主 高橋千洋

(富士宮市中央町在住)

一 ご挨拶・独吟

二 夏 鶉ノ段 (うのだん) シテ 田崎 甫

亡者は犯した罪のため、地獄へと続く闇路を帰ってゆく。

三 秋 半部クセ (はしとみ) シテ 葛野 りさ

光源氏と夕顔の君、扇と花。恋のはじまりの、あの日の記憶。

四 冬 兼平 (かねひら) シテ 田崎 甫

これぞ自害の手本よと、太刀を口に啜えて真つ逆さまに馬から飛び降り、体を貫かれて果てたのだった。

五 春 藤戸 (ふじと) シテ 田崎 甫

あの浮洲の岩のところへ私を連れて行き、刀で何度もさし通し深い海の底に沈められたのだった。

鶉の段(うのだん) 夏

- 1 しめる松明振り立てて。藤の衣の玉だすき。
- 3 鶉籠を開き取りいだし。島津巢おろし荒鶉ども。
- 5 この川波に。 ばつと。 放せば。面白の有様や。 面白の有様や。
- 7 底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追ひまわし。 かづき上げすくひ上げ。隙なく魚を食ふ時は。 罪も報も。 後の世も忘れ果てて面白や。 漲る水の淀ならば。
- 9 生簀の鯉や上らん玉嶋川にあらねども。小鮎さばしるせせらぎに。
- 11 かだみて魚はよもためじ。 不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。 思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ。
- 13 鶉舟の篝火消えて。 闇路に帰るこの身の名残惜しさを。
- 15 いかにせん名残惜しさをいかにせん。

兼平(かねひら) 冬

- 39 兼平はかくぞとも。 知らで戦かふその隙にも。御最期の御事を心にかくるばかりなり。
- 41 さてその後に思はずも。 敵の方に声立てて。木曾殿討たれ給ひぬと
- 43 呼ばはる声を聞きしより 今はなにをか期すべきと
- 45 思ひ定めて兼平は これぞ最期の荒言と
- 47 鐙ふんばり大音あげ 木曾殿の御内に今井の四郎
- 49 兼平と名のりかけて。 大勢にわって入れば。もとより。 一騎当千の秘術をあらはし。
- 51 大勢を。 栗津の。 汀に追っつめて。 磯打つ波の。 まくりぎり。 蜘蛛十文字に。
- 53 打ち破り駆け通って。 その後。 自害の手本よとて。 太刀をくはえつつ逆様に落ちて貫ぬかれ失せにけり。
- 55 兼平が最期のしぎ目を驚かす有様なり目を驚かす有様なり。

半部(はしとみ) 秋

- 20 其頃源氏の 中将と聞えしは。 此夕顔の草枕。
- 21 唯假臥の夜もすがら。 隣を聞けば三吉野や。御嶽精進の御声にて。 南無当来導師。
- 23 弥勒佛とぞ唱へける。 今も尊きお供養に其時の思ひ出でられてそぞろに濡るる袂かな。
- 25 猶それよりも忘れぬは。 源氏此宿を。 見初め給ひし夕つ方。 惟光を招き寄せ。
- 27 あの花折れと宣へば。 白き扇のつまいたうこがしたりしに此花を折りてまゐらす。
- 29 源氏つくづくと御覧じて。 打ち渡す遠近人に問ふとても。 それ其花と答えずは。 終に知らでもあるべきに逢ひにあふ
- 31 ぎを手にふる。 契りの程の嬉しさ。 をりをり尋ねよるならば。
- 33 定めぬ海士の此宿の。 主を誰としら浪の。
- 35 よるべの末を頼まんと。 一首を詠じおはします。
- 37

藤戸(ふじと) 春

- 58 思ひの外に一命を。 召されし事は馬にて。海を渡すよりも。 これぞ稀代のためしなる。
- 59 さるにても忘れ難や。 あれなる。 浮洲の岩の上を我をつれて行く水の。 氷の如くなるかたなを抜いて。 胸のあたりをさし通し。
- 61 さしとほざるればきも魂も。 消え消えとなる所を。 其まま海に押し入れられて。
- 63 千尋の底に。 沈みしに。 折節引く汐に。 折節引く汐に。
- 65 引かれて行く浪の浮きぬ沈みぬ埋れ木の岩の。 狭間に流れかかつて藤戸の水底の。
- 67 悪龍の水神となつて恨みをなさんと思ひしに。 思はざるに御弔ひの。 御法の御船にのりを得て。 即ち弘誓の舟に浮かめば見馴棹。
- 71 さし引きて行く程に。 生死の海をわたりて願ひのごとくにやすやすと。
- 73 彼の岸に至り至りて。 かの岸に至り至りて。 成仏得脱の身となりぬ成仏の。 身とぞなりにける。
- 75